

# 朱熹『小学』と朱寿昌譚

松野敏之

## 序

孝子の話を伝える『二十四孝』<sup>1</sup>の一人に、朱寿昌が挙げられている。『二十四孝』の中では新しい、北宋時代の人である。幼い頃に離ればなれになった母親を、五十歳を越えてから捜すことを決意し、見事に再会を果たしたという孝子である。たとえば、『全相二十四孝詩選』<sup>2</sup>の朱寿昌では次のように記す。

七歳 生きながら母と離れ 参商 五十年  
一朝 相ひ見面し 喜氣 皇天を動かす

朱寿昌が七歳の頃、父が母を家から出してしまったため、以来、母と子は五十年間会うことはなかった。寿昌は各地に赴き、母を捜し尋ね続けた。人と母のことを話題にすると、涙を流すこともあった。熙寧年間（1068-1077）の初め、寿昌は官を棄てて、母を捜すため秦の地に向かった。家族と別れ、「母に会わなければ、家には帰らない」と誓った。その後、同州を訪れた折に、母に出会うことが出来た。母の年齢は七十歳余りであった。蘇東坡に彼のことを賛美した詩がある。

七歳生離母 参商五十年 一朝相見面 喜氣動皇天

朱壽昌生七歳、父出其母、母子不相見者五十年、壽昌行四方求之不已。與人言輒流涕。熙寧初、棄官入秦、與家人訣、誓不見母、不復還。行次同州、得焉。劉氏年七十餘矣。東坡有詩美之。

朱寿昌が母親を捜し出したという話は、当時の神宗（在位 1067-1085）の時代においてすでに知られた佳話であったが、南宋以降も朱熹『小学』、王称<sup>(附)</sup>『東都事略』で採りあげられ、『宋史』の孝義伝や『二十四孝』に収められた。いわゆる『二十四孝』は中国・朝鮮・日本の各地に伝播し、異本も多く存在するが、各話につけられた四字の題によれば、朱寿昌の話は「棄官尋母」とまとめられる。棄官尋母、すなわち官を棄てて、五十年前に別れたきりの母を捜し出したことを称賛するものである。以来、朱寿昌の話においては「棄官」して母を尋ね当てたということが重視されることになる。

先に挙げた『全相二十四孝詩選』の朱寿昌は、徳田進氏によって『小学』善行篇の文章に依拠して編集されていることが指摘された<sup>3</sup>。また、坪井直子氏は朱寿昌の話を『二十四孝』と『小学』とで比較し、『小学』にはない「刺血写経」

の一句が、御伽草子『二十四孝』の朱寿昌などに見られることを指摘し、日本文学の中に見られる「刺血写経」について考察した<sup>4</sup>。『全相二十四孝詩選』の朱寿昌の文章は確かに『小学』に基づいているのかもしれないが、各時代・各地域で編纂された『二十四孝』の中には、「刺血写経」に関する話が収められたものもあるということである。この違いを坪井氏は、『小学』が仏教の話題を避けたことと、「棄官」を重視したために、「刺血写経」の一句を削除したと推定する。

朱熹が『小学』に朱寿昌の話を収める際に、意図的に「刺血写経」を削除したのは確かであろう。「刺血写経」の句があることによって、朱寿昌の母捜しは、仏教の教えに従う、求道者のような印象になってしまうからである。このような収録の際に一部を削除し、全体のイメージを改編することは、『小学』の他の話にも見られる<sup>5</sup>。しかし、『小学』における話を検討するには、『小学』全体の構成をふまえる必要がある。『小学』全六巻は、巻一～巻三と巻四～巻六とで大きく分かれ、巻一～巻三は経書に記載された「立教」「明倫」「敬身」の教えを紹介し、巻四～巻六ではその教えにふさわしい後世の人物の記録を収めている。朱寿昌の話は『小学』の中では善行篇（巻六）の17章に収められる。これがもし「君臣」の具体例として挙げられているなら、それは「棄官」を重視したものと言えるかもしれない。たとえば、王祥の弟王覽は、『晋書』では「孝友」（父母に事えて孝順、兄弟に対して友愛）と称されており、父母・兄弟どちらの例にもなる人物である。それを『小学』では父母に対する孝としてではなく、兄に対する友愛の具体例として収めている。王覽が兄の王祥を想う心情を重視しての分類であろう。『小学』の構成は細部にわたるまで入念に分類されており、経書の教えとそれに対応する具体的な話も用意しているのである。そのため、朱寿昌の話を含め、朱熹の『小学』編纂意図を考えるためには、『小学』全体の構成を概観する必要もあろう。

以上のような問題関心から、本稿では朱熹がいかなる観点から朱寿昌の話を『小学』に収めたのかについて検討したい。それは『二十四孝』の系譜として『小学』の朱寿昌を見るものではない。『小学』における朱寿昌の位置づけの検討を通して、『小学』の構成を把握することを目的とするものでもある。

## 一

朱寿昌の話は神宗朝の当時においても有名なものであり、沈括（1030～1094）は、朱寿昌が母を捜しだした話を記した後、「数人の士人が彼のために伝を記し、丞相の王安石（荊公）を始めとして、みな「朱孝子詩」を詠み、その数は数百篇になる」〈士人爲之傳者數人、丞相荊公而下、皆有朱孝子詩數百篇〉（『夢溪筆談』巻9）と述べている<sup>6</sup>。事実、王安石（荊公）、司馬光、蘇軾等に朱寿昌を詠んだ詩が伝わっている。現在確認できるものだけでも、文同「朱康叔郎中棄官求母於金州因會華清宮作此詩送之」（『丹淵集』巻5）、司馬光「贈河中通判朱郎中」

(『伝家集』巻9)、蘇頌「送朱郎中寿昌通判河中府」(『蘇魏公文集』巻3)、王安石「送河中通判朱郎中迎母東歸」(『臨川文集』巻31)、蘇軾「朱寿昌郎中少不知母所在刺血写經求之五十年去歲得之蜀中以詩賀之」(『東坡全集』巻4)などがある<sup>7</sup>。同時代の人々から称賛された朱寿昌であるが、特に文同(1018～1079)と蘇軾(1036～1101)は、直接、朱寿昌と面識を持っており、朱寿昌についての彼らの記述は注目に値する。

文同は、朱寿昌との出会いを「送朱郎中詩序」(熙寧5年〔1072〕の執筆)の中で述べている。それによれば、熙寧3年(1070)3月癸丑(12日)、蜀(四川)から台州に戻ろうとした途次、臨潼(今の陝西省西安市)の華清道館に宿泊し、そこで朱寿昌と知り合った。朱寿昌は西(蜀の方向)に向かうところで、その理由を尋ねたところ、母と幼い頃に別れたこと、それ以降ずっと母を思い続けていることが語られる。そして朱寿昌は次のように続ける。

去年、広徳(今の安徽省宣城市)にいたが、ある日、(母のことで)感じる  
ことがあった。そこで官を辞し、決意して天下各地を訪れ、ひょっとしたら  
母に会えないものかと願った。まず函谷・上雍の地に出たところで、(母に)  
辿りつけるように覚え、その道ははっきりとはしていないが何か信じられる  
ものがあつた。そこで葷や血食などの生臭い料理を断ち(精進料理のみを食  
べ)、臂を刺してその血で版木を刷り、仏書を臨書して、通った道すがら散  
布し、母の耳に届くよう祈った。ここに至るまでに多くの日時を費やしたが、  
「あるいは金州(今の陝西省安康市)にいる人がそうではないか」と言われた。  
そのため明日は、また南に向かおうと思っている。

去歳在廣徳一日、若有所感者、遂解官、決欲走天下、冀萬一或遇之。當先出  
函谷上雍、宜有得道、其迹彷彿殊可信、乃斷葷血食、刺臂鏤板、寫摹佛書、  
輦散於所經由道、區區祈徹母氏之聽聞、至此累日、又言儻在金州者。明日且  
復如南矣。(『丹淵集』<sup>8</sup>巻26・「送朱郎中詩序」)

母のことを常日頃から思っていた朱寿昌であったが、知広徳軍の任にあった昨年のある日、感じるころがあつて官を辞め(棄官)、母を捜す旅に出たという<sup>9</sup>。朱寿昌がいつから仏道に帰依していたかは分からないが、母を捜し出すために、肉や酒、香りの強い野菜などの生臭い料理(葷・血食)を絶ち、臂を刺して血で仏典を書き、翌日には臨潼から南にある金州に向かうというのである。

この話を聞いた文同は、自身も母を亡くしたところであつたため、二人でしばらく母のことを思つてむせび泣き、夜分に散会した。しかし文同は明け方まで寝付けず、翌朝、口占百字詩(即興で詠んだ百字の詩)を朱寿昌に贈つて必ず母に

会えると励まし、二人は別れたという。この後、ほどなくして文同は京師（開封）で朱寿昌の噂を聞くことになる。長安大尹の錢明逸が朱寿昌を朝廷に表彰したのである。朱寿昌が官を棄てたのは母を捜しだすためであり、馮翊の地にて再会することができたこと、朱寿昌をもとの官に復すべきことが上表され、認められた。文同は母を捜す旅の途次にある朱寿昌に直接会って話を聞いており、この時は朱寿昌の母を思う気持ちに心動かされたと共に、酒肉等の生臭い料理（葷・血食）を絶ち、臂を刺した自分の血で写経しながら捜していたことを記述している。

## 二

朱寿昌に直接会って記録を残している人物に蘇軾もいる。蘇軾自身、「私は黄州（今の湖北省黃岡市）に謫居していた頃、朱寿昌が鄂州（今の湖北省鄂州市）の長官として赴任したため、頻繁に往来し親しく交わった」（『東坡志林』巻二）と述べている<sup>10</sup>。蘇軾が黄州に謫居していたのは、元豊3年（1080）から元豊7年（1084）のことであり、この時期に朱寿昌と厚誼を結んでいたことになる。朱寿昌の方は、官を棄てて母と再会を果たした後、母に対する孝心から特別に復職を認められ、河中府通判、知鄂州、司農少卿などを歴任した（『宋史』巻436・朱寿昌伝）。

蘇軾は「朱寿昌梁武懺贖偈」を記して、朱寿昌の孝心を称賛した。その序文において、あらゆる苦しみは愛に起因することを述べた上で、次のように記している。

仏もまた「愛別離苦」（愛する者と別れる苦しみ）を述べる。父母との離別は、はかりしれないほどの苦しみであり、離別の中においても、生きながらに離ればなれになるのが最も苦しいことである。いま、朱寿昌という大長者がいる。生まれてから七歳で母が家から出された。長じてからは母のことを思念し、涙にくれながら捜し求めた。自ら刺した血で写経し、仏に礼拝・懺悔すること四十年あまり、こうして母と再会を果たしたのである。

諸佛亦言、愛別離苦。父母離別、其苦無量。於離別中、生離最苦。有大長者、曰朱壽昌。生及七歳、而母捨去。長大懷思、涕泣追求。刺血寫經、禮佛懺悔、四十餘年、乃見其母。（『東坡全集』巻99・「朱寿昌梁武懺贖偈 [并序]」）

父母と生きながらに離別することは苦しみの最たるものであり、朱寿昌はその苦しみを乗り越え、「刺血写経」して母との再会を果たした。蘇軾が重視するのは、朱寿昌が仏教の求道者のように母を捜し続けたことであり、自分の血で仏教經典を書写したことが強調されている。蘇軾には他にも朱寿昌のことを詠んだ七言古詩があり、その詩題は「朱寿昌郎中<sup>わか</sup>少くして母の在る所を知らず 刺血写経し

て之を求むること五十年 去歳 之を蜀中に得たり 詩を以て之を賀す」(朱寿昌郎中少不知母所在刺血寫經求之五十年去歳得之蜀中以詩賀之)とある。「刺血写経」を詩題に入れているのである。

直接、朱寿昌に会っている文同・蘇軾の二人が、自分の血で写経しながら母を捜したことを記述しているのは、二人が「刺血写経」を肯定的にとらえているからである。そしてまた、朱寿昌自身も母捜しにおける「刺血写経」を積極的に語ったのであろう。朱寿昌にとって、母捜しと「刺血写経」は切り離すことのできないものだったと言える。

しかし、朱寿昌自身の意図しないことだと思われるが、「官を棄てた」ことが注目されることとなる。これには当時の政界の動向も関係してくる。朱寿昌が幼い頃に別れた母を、五十年経ってから捜し出したことを当時の人々が称賛したのは事実である。しかし朱寿昌の話はそれだけにとどまらなかったようで、蘇軾は朱寿昌について次のようにも言及する。

蔡延慶は生みの母親が亡くなくても、長らく喪に服することはなかった。聞くところによると、李定も実母の喪に服さず、台諫に弾劾されてようやく追服を要請したという。いわゆる(『礼記』檀弓下に見える)「蟹<sup>かい</sup>匡<sup>きやう</sup>蟬<sup>せん</sup>綏<sup>すい</sup>の喪礼を、成人<sup>せいひと</sup>の弟は行なわなかった(後に罰せられるのを恐れて慌てて行なった)」というのが分かるというものである。時に朱寿昌という人物がいる。生みの母親が、三歳の頃に家から出された。成長すると、「刺血写経」しながら生涯にわたって母を捜し続けることを誓い、およそ五十年経って、ようやく再会することができた。三年の間奉養し、母が亡くなった。朱寿昌は(悲しみのあまり)壊れんばかりであった。

蔡延慶所生母亡、不爲服久矣。聞李定不服所生母、爲臺所彈、乃乞追服。乃知蟹匡蟬綏、不獨成人之弟也。是時有朱壽昌其所生母三歲捨去、長大刺血寫經、誓畢生尋訪、凡五十年、乃得之、奉養三年而母亡。壽昌至毀焉。

(『東坡志林』卷2)

朱寿昌を称賛することが、官を辞めて母の喪に服さなかった蔡延慶・李定を批判することに通じる。特に李定は、若い頃に王安石に師事し、政界でも王安石を支える新法派であった。母が亡くなり、本来なら官職を退いて喪に服すべきであるのに、王安石の建言によってそのまま働き続けた。もとより親の喪に服さない者への批判は激しいものであるが、この時は新法党・旧法党の党争が絡み、李定に対する反発は強かった。当時の状況を知る邵伯温(1037-1134)も朱寿昌の話を書き記述し、蘇軾の詩を引用した後で、「王安石(荊公)は李定を台官に推薦した



が、李定はかつて母の喪に服さなかったため、台諫・給事中・中書舎人がいずれも彼が不孝者であって、採用すべきではないことを論じた」〈王荆公薦李定爲臺官、定嘗不持母服、臺諫給舍俱論其不孝、不可用〉（『邵氏聞見録』巻13）と記す。朱寿昌自身は望んでもいなかったことであろうが、政争の題材に挙げられ、母親を捜すために「官を棄てた」ことが称賛されることになるのである。

以上、朱寿昌と直接関わりのあった人々の記述からは、「刺血写経」が重視されたことと政治的な意図があるにせよ「棄官」が称賛されたことがうかがえる。それでは南宋の朱熹（1130～1200）も、「棄官」を重視して『小学』に朱寿昌の話を取り、「刺血写経」の句を削除したのであろうか。『小学』における朱寿昌の記述から確認していきたい。

### 三

『小学』の序文となる「小学書題」を朱熹が著したのは淳熙14年（1187）であるが、『小学』の編集を集中的に行なったのは淳熙11年（1184）秋冬頃から翌12年の春頃にかけてである<sup>11</sup>。この時期の朱熹がどこから朱寿昌の話を持ってきたのかは明らかにできないが、光宗の紹熙年間（1190～1194）の初刻とされる王称<sup>(傳)</sup>の『東都事略』と『小学』の記述はほぼ同文となっている。王称<sup>(傳)</sup>が朱熹『小学』を見て『東都事略』に収めたという可能性もあるが<sup>12</sup>、おそらく当時、『小学』『東都事略』に収められるような朱寿昌の話が通行していたのであろう。朱寿昌が亡くなってから約百年後に編纂された『小学』『東都事略』の記述と、朱寿昌と直接の面識を持つ文同・蘇軾たちの記述とでは当然ながら異なるところが出てくる。朱寿昌のことを収めた『小学』善行篇・17章の全文は次の通りである。

朱寿昌は七歳の頃、父が雍州（陝西省）の長官となった。母の劉氏を家から出し、民間に嫁がせた。そのため、母と子は会うことなく五十年が過ぎた。寿昌は四方各地に赴いて母を捜し続けた。贅沢な酒や肉は減多に食べなかった。人と母のことに話が及べば、涙を流して悲しんだ。熙寧年間の初め頃、官を棄てて秦（陝西省）の地に入り、家の者と別れ、「母に会わなければ、再び家には帰らない」と誓った。同州（陝西省渭南市）に至ったところで母と再会することができた。劉氏は時に七十歳となっていた。雍州の長官銭明逸が朱寿昌のことを朝廷に申し上げた。詔がくだされ、寿昌は復官し、これによって天下の人々がその孝心を知ることとなった。寿昌は再び郡守に任じられたが、母の近くにおいて奉養したいということから、河中府の通判に就いた。同母の弟妹たちを迎えて家に戻った。数年ほど暮らしたところで母が亡くなった。朱寿昌は涙を流し、失明するかというほど悲しんだ。（朱寿昌は）異父の弟妹たちを手厚く養育し、彼らのために田宅を買って住ませた。宗

族に対しても、とりわけ恩意を尽くした。亡き兄弟の娘二人を(兄弟に替わって)嫁がせ、埋葬できずにいた者たち十人余りを埋葬した。やはり朱寿昌の天性がこのようだったのである。

朱壽昌生七歳、父守雍。出其母劉氏嫁民間、母子不相知者五十年。壽昌行四方求之不已。飲食罕御酒肉。與人言輒流涕。熙寧初、棄官入秦、與家人訣。誓不見母、不復還。行次同州得焉。劉氏時年七十餘矣。雍守錢明逸以事聞、詔壽昌還就官。繇是天下皆知其孝。壽昌再爲郡守。至是以母故通判河中府。迎其同母弟妹以歸。居數歲母卒。涕泣幾喪明。拊其弟妹益篤、爲買田宅居之。其於宗族尤盡恩意。嫁兄弟之孤女二人、葬其不能葬者十餘喪。蓋其天性如此。

朱寿昌が官を棄てて母を捜しに行き、五十年ぶりに再会を果たしたという大筋は同じである。大きく異なるのは、先行研究でも指摘されている「刺血写経」の件が削除されていることであろう。朱熹『小学』とほぼ同文を取める『東都事略』には、「人と母のことを言うと、涙を流して悲しんだ」〈與人言輒流涕〉の後に、「仏教の法に則って、臂と頭のとっぺんを焼き、自ら刺して流れ出た血で仏書を写し、その志が遂げられることを願った」〈以浮屠法、灼臂燒頂、刺血寫佛書、冀遂其志〉とあり、「刺血写経」に関する話題が見られる。『小学』ではちょうど「刺血写経」に関わるところだけが削除されているのであるが、そもそも朱熹はこのような刪去を『小学』全篇にわたって行っている。『小学』の編纂方針を劉清之(1133-1189)と話しあっていた時、劉清之が全文をそのまま引用したことに対し、朱熹は「約守」にすることを求めており、自身の編纂を「簡易」と評している(『朱文公文集』卷35・「答劉子澄」七、同・「答劉子澄」十二)<sup>13</sup>。

『小学』では「刺血写経」に関する話題が削られているが、その一方で『東都事略』には見られない、「贅沢な酒や肉は減多に食べなかった」〈飲食罕御酒肉〉という一文が加わっている。文同が「(酒や肉などの)生臭い料理を断った」〈断葷血食〉と記していたことが想起されるが、朱寿昌が仏道に帰依する者として酒や肉などを断って精進料理のみを食べていたという話に基づくものかもしれない。しかし、「刺血写経」が削除された上で、酒や肉は減多に食べなかったとなると、文意はやや異なってくるであろう。『小学』の文章の流れからすると、贅沢な食事ものを通らないほど、母のことを思って悲しんでいた姿が連想されるのである。この改編によって朱寿昌の悲しみの深さが強調されることになる。

また『東都事略』と比較するならば、「刺血写経」以外にも削除されている一文がある。母が亡くなった後、「白い鳥が墓の上に集まった」〈有白鳥集其墓上〉というものである。孝子が親の墓の傍らに廬を結んで喪に服していると、禽獣が集まってくるということが語られる。いわゆる「孝感」に類する話であり、「白鳥」が集まることは孝子の証しとなる。朱熹の時代、おそらく『東都事略』に見える

ように、喪に服す朱寿昌の周りに白鳥が集まったという話が伝えられていたであろうが、朱熹はこれも採りあげなかった。孝子の親を思う心によって天地・動植物が感応するという孝感譚は、孝に過度な意味をもたせることに通じるからであろう。孝を日常道徳の一環として位置づける朱熹にとって、孝に過度な重みを持たせかねない孝感は警戒すべきものとなる。そのため、孝子の心に感応して白鳥が集まってきたという話を朱熹は削除したのであろう。

次に、文同・蘇軾たちの記述と『小学』とを比較した場合、大きく二つの違いが見える。一つは朱寿昌が家族と別れる際に、「母に会わなければ、再び家には帰らない」〈誓不見母、不復還〉と誓ったことであり、いま一つは朱寿昌の母が亡くなった後の身内に対する厚遇の記述である。父の宗族に対しても、母の子(異父の弟妹)に対しても、丁寧に面倒をみたことが語られている。

朱寿昌と同時代の文同や蘇軾のように朱熹が「刺血写経」を重視しないのは確かである。しかし、後の『二十四孝』が注目するように、「官を棄てて母を捜した」ことを朱熹は重視したのであろうか。朱寿昌が酒肉を減多に食べなかったことを記すことによって、仏道に帰依した者の母捜しではなく、母を想う深い悲しみを強調しているが、特に官を棄てたことを強調するような改編はない。逆に『二十四孝』では削除されている後半の身内に対する話はなぜ削除しないのか。朱熹は『小学』を編纂する際、文章を大幅に削除したものもある。善行篇13章にとりあげる王延は、継母が真冬に生魚を食べたいという願いを叶えるため汾水で哭して神に祈ったところ大魚が飛び出てきたという話があるが、それらはすべて削除されている。日常の父母への接し方のみが記されているのである。また嘉言篇15章の庾黔婁の話も後半を削除している。もし朱寿昌の母に対する孝心を強調するのであれば、『二十四孝』のように朱寿昌の後半を削除しても良かったのかもしれない。なぜ後半の話を削除しなかったのか。このことを確認するために、朱熹の『小学』がどのように構成されているかを整理してみたい。

#### 四

『小学』は全六巻から成り、大きくは二つに分けられる。朱熹自身は、経書を始めとする漢以前の文章を内篇(巻一～巻四)、漢以後から宋までの文章を外篇(巻五・巻六)としているが、『小学』の構成からすると巻一～巻三と巻四～巻六で大きく分かれることになる。『小学』の配列の核となっているのは、「立教」「明倫」「敬身」の三つで、それぞれが巻一「立教篇」、巻二「明倫篇」、巻三「敬身篇」に配されている。巻四～巻六は、稽古篇(巻四)の序文で朱熹自身が「古人の言行をとりあげてこの篇をまとめ、読者を喚起させようとするものである」(摭往行、實前言、述此篇、使讀者有所興起)と記しているように<sup>14</sup>、経書や史書などの文



献からそれぞれ「立教」「明倫」「敬身」を実践した人物の言行や戒めとして相応しい教訓などを収める。朱熹が示した配列に基づいて、『小学』全386章の構成を示せば下表ようになる。

立教第一 13章		稽古第四 47章			嘉言第五 91章			善行第六 81章									
明倫第二 108章	父子	39章	立教 4章	明倫	31章	父子	17章	立教 14章	明倫	41章	父子	14章	立教 8章	明倫	45章	父子	10章
	君臣	20章		君臣	5章		君臣		10章	君臣		8章					
	夫婦	9章		夫婦	4章		夫婦		8章	夫婦		5章					
	長幼	20章		長幼	3章		長幼		4章	長幼		10章					
	朋友	11章		朋友	2章		朋友		3章	朋友		1章					
	通論	9章				通論	2章				通論	11章					
敬身第三 46章	心術	12章	敬身 9章	心術	3章	敬身 36章	心術	16章	敬身 28章	心術	14章	敬身 28章	心術	14章	敬身 28章	威儀	7章
	威儀	21章		威儀	2章		威儀	5章		威儀	7章						
	衣服	7章		衣服	3章		衣食	2章		衣服	1章						
	飲食	6章		飲食	1章		読書	13章		飲食	6章						
			通論	3章													

『小学』は童子の学ぶべき「事」を提示した書ではあるが、いわゆる幼い子供向けに編纂されているわけではない。人間関係の象徴である五倫（父子・君臣・夫婦・長幼・朋友）の一つ「夫婦」のことも採りあげていれば、親の喪に関することも採りあげている。童子向けに知っていれば良いということを示したのではなく、むしろ人として誰しも知っておかなければならない「事」を提示した書と見るべきであろう。若干の例外はあるものの、『小学』全篇の構成は非常にバランス良く配されている。立教（人として学ぶべき教え）・明倫（人倫を明らかにすること）・敬身（我が身を敬むこと）を核として、その具体例を稽古篇（漢代以前の人の言行）・嘉言篇（漢以後の人の良い訓話）・善行篇（漢以後の立派な行動）で示している。

朱熹は意図的にバランス良く各章を配当したと思われるが、それでも明倫の中の「孝」＝親子関係についての比重は重い。稽古篇全47章のうち明倫に関わるものが31章、同様に嘉言篇全91章のうちの41章、善行篇全81章のうち45章が「明倫」に関するものであり、そのうち孝に関わるものは80章ある。「明倫」に関わる225章のうち80章、およそ4割強が孝が採りあげられていることになる。『小学』全体の比率としても2割強が孝に関わるものとなっており、孝を重視していたことは疑いない。

その孝には、どのような話があるか。経書から引用・編纂した明倫篇は、第1章～第39章を孝に割くが、おおよそ次のような六つの話題に分類できる。

- (一) 1章～15章 父母への謹事・孝養
- (二) 16章～20章 父母没後の親族への敬愛
- (三) 21章～23章 父母に対する諫め
- (四) 24章～25章 父母の病と看病

(五) 26章～33章 父母の喪・祖先祭祀

(六) 34章～39章 通論

第一には、父母に対する直接的な接し方について紹介する(1章～15章)。主に『礼記』を引用しながら、父母への仕え方、孝養の尽くし方を採りあげる。

第二には、父母亡き後の親族との接し方や、子の妻としてあるいは庶子としての関わり方について紹介する(16章～20章<sup>15)</sup>)。父母が愛した庶子や庶孫、あるいは犬馬に対しても、父母と同じように敬愛することが求められている。これは父母亡き後も、父母の愛した人・物を同じように敬愛することが父母に対する孝となるからである。また、妻として姑(義母)への仕え方や、非嫡出子であっても宗族の祭祀に参加すべきことなども見える。ここでは父母に直接どのように仕えるかということではなく、父母を中心とする家族・親族にも心を尽くすことが亡き父母に対する孝でもあるということを教えるものである。

第三には父母を諫めることを紹介する(21～23章)。父母への諫めは、『孝経』でも諫争章として採りあげられており、父母に従うことは大前提であるが、それでも父母が過ちを犯している場合、孝子としては諫めなければならない。ただそれをどのように諫めるべきかということ述べることとなる。

第四は、父母の病とその看病について(24・25章)。第五は父母の喪祭(26～33章)。そして第六として孝の通論とでも言うべき『孝経』を採りあげ、併せて不孝についても紹介する(34～39章)。『小学』に引用する『孝経』の文章は、いわゆる古文孝経でも今文孝経でもなく、朱熹が淳熙13年(1186)に成書した『孝経刊誤』の文章となっている<sup>16)</sup>。自分自身を大切にすべきことや自分の生命は父母・祖先から受けつがれているものであることなどが語られる。

これら明倫篇でとりあげた孝に関する経書の教えについて、稽古篇(巻四)・嘉言篇(巻五)・善行篇(巻六)では、具体例となる話を紹介し、明倫篇の教えを明らかにし、かつ実感を持たせるようにしていく。

## 五

稽古篇・嘉言篇・善行篇は、話題ごとにまとめられてはいるが、それらの話は時代順に並べられているため、明倫篇ほどには整然と分類されていない。その上で、明倫篇の孝に関する章を採りあげると、おおよそ次のように配当し得る。

なお、下表の数字は、それぞれの章の番号となる。

	明倫篇 (1章-39章)	稽古篇 (5章-21章)	嘉言篇 (15章-28章)	善行篇 (9章-18章)
(一) 父母への謹事・孝養	1～15	5-8,12,14,16,17	15-18	9,*10,11,13,*14,*17
(二) 父母没後の親族への敬愛	16～20			*10,*17
(三) 父母に対する諫め	21～23			
(四) 父母の病と看病	24～25	9	19	*14,15
(五) 父母の喪、祖先祭祀	26～33	10,11,18-20	20-26,28	*10,12,16,18
(六) 通論	34～39	13,15,16,21	27	*17

※「\*」印は、話題が複数にわたる章。

先に分類した中では(二)父母没後の親族への敬愛、(三)父母に対する諫め  
の話題が少なく、第三については具体的な話は挙げられていない。ただし、(三)  
の「諫め」は扱いの難しさもある。父母への諫めを強調しすぎると、安易に親に  
逆らうことを促すことにもなりかねないからである。『小学』の中では、善行篇  
の「長幼」のところで、王祥の弟の王覽が兄につらくあたる母を諫めるとい  
う話題が採り上げられている。王祥は、『孝子伝』や『二十四孝』にもとりあげられ  
る有名な孝子で、継母の酷いしうちに耐え、継母のために真冬に生魚を求めて氷  
の張った池に飛び込もうとしたところ、氷が割れて池から鯉が躍り出てきたとい  
う話(臥氷求鯉)が伝えられる。『小学』善行篇に収めるのは、その王祥対し  
て継母が酷い仕打ちをしていた頃、王祥の弟(継母の実子)の王覽がその母を諫  
めたという話である。話だけなら孝の諫めの例として挙げてもおかしくないが、  
朱熹は「長幼」のところに配した。弟の兄を思う心という側面を重視したとい  
ことになるが、「諫め」の話題として採りあげることを避けたということでもある。

(三)の「諫め」がむしろ具体例としては挙げ難いものであるとすれば、では(二)  
の話題についてはどうか。父母が愛した人・物を父母亡き後も敬愛すること、ひ  
いては父母を中心とする家族・親族に心を尽くすことが父母に対する孝でもある  
という教えである。たとえば、明倫篇17章に、「父母が愛するものは、同じく愛  
し、父母が敬うものは、同じく敬う。犬や馬であってもこのようにすべきで、ま  
して人であればなおさらである」〈是故父母之所愛、亦愛之、父母之所敬、亦之敬。  
至於犬馬盡然、而況於人〉とある。父母に直接孝養を尽くすだけでなく、父母  
亡き後も父母の愛した身内に敬愛の念を持って接することが述べられている。こ  
の具体例として最適なのが、朱寿昌の話となる。五十年ぶりに母を捜しあて、老  
母が亡くなるまで孝養を尽くした。その後、朱寿昌は父方の兄弟・身内(宗族)  
に対しても、母方の弟妹(異父弟妹)に対しても手厚く面倒をみたのである。つ  
まり『小学』の構成上、朱寿昌の話は孝の(二)の教えの具体例としても最適な  
のであり、この(二)の教えに関しては他に類似の話がない<sup>17)</sup>。そのため、『小学』  
の構成からすると、朱寿昌が官を棄てて母を捜し出したという前半の話だけでは  
不完全なのである。父を同じくする兄弟(宗族)・異父弟妹たちの面倒をよく見

たという後半の話も重要になってくるのである。

傍証としてではあるが、『小学』を読み込んだ明代の陳選もこの朱寿昌の話に注目し、『小学』に附した注で次のように論じている。

（朱寿昌は）母を愛する心を推し広げていって、同母の弟妹たちを篤く遇した。父を愛する心を推し広げていって、宗族・兄弟たちを篤く遇した。やはり至孝というものは天性から出てこのようであるのだ。

推愛母之心而篤於同母弟妹。推愛父之心而篤於宗族兄弟。蓋至孝出於天性而然也。  
（陳選 増註『小学集註大全』）

孝が父母に対して発揮される心であることは言うまでも無い。それが父母の残した家族に対しても拡大されるべきものであり、『小学』明倫篇でもその教えを引用している。ただ、その具体例は乏しかったようで、稽古篇・嘉言篇・善行篇のなかで、孝（父母を愛する心）を推し広げて、父母の残した身内に対しても敬愛の心をもって接した最適の実例は、朱寿昌となるのである。

## 結

本稿では、朱熹が朱寿昌の話をもどのように評価して『小学』に収めたかということについて検討した。全 386 章ある『小学』において、朱寿昌の話は重要な位置づけとなっている。

そもそも朱寿昌の話のどこに注目するかということにおいて、いくつかの異なる観点がある。五十年を経て、幼い頃に離ればなれになった母を捜しだしたことを称賛することには変わりはない。その上で、朱寿昌本人にとっては、仏教に帰依し、「刺血写経」しながら母を捜したということが重要なことであったと思われるが、後世の人の着眼点は異なってくる。新法派の李定が官を辞めて母の喪に服さなかったことを批判するのに、朱寿昌が引き合いにだされてしまったため、母を捜すために「棄官」したことが注目されてしまう。『二十四孝』が「棄官尋母」とまとめるのも、このような評価が背景にあったからであろう。

先行研究においては、『小学』も「棄官」を重視したと指摘されたが、朱熹の刪去と『小学』の構成からすれば、「棄官」だけに注目していたとは考え難い。「刺血写経」を削除し、代わりに酒や肉などは減多に食べなかったことを加えることにより、仏道の求道者ではなく、母と会えないことを深く悲しむ孝子としての姿が描かれている。また朱熹にとって朱寿昌の話は、父母の残した遺児たちの面倒もよく見たという後半の話題が重要になってくる。『小学』は立教・明倫・敬身の教えを巻一～巻三で紹介し、その実例を巻四～巻六で紹介することによって経書の教えに実感を持たせるという構成になっている。『小学』の中でも最も多く

の章を費やすのが孝についてであり、その具体例も適切に配されている。ただ、父母の残した家族に対しても、父母と同じように敬愛したことの具体例は乏しく、『小学』のなかでこの具体例に相当するのが朱寿昌の話となる。逆に言えば、『小学』の構成がいかにバランス良く、入念に考えられたものであったかということがうかがえる。朱熹『小学』の特徴は、立教篇・明倫篇・敬身篇を核とした上で、その実例を稽古篇・嘉言篇・善行篇に挙げていることである。この配当のバランス感覚の良さも、朱熹の特筆すべき特徴となろう。

また、朱寿昌の話そのものに注目するならば、幼い頃に別れた母親を五十年の時を隔てて捜し出したことは、孝の在り方として『小学』の話題を多彩にさせている。『二十四孝』が朱寿昌を採りあげるようになるのも、他に類例のない話だからであろう。孝子の物語という広がりから見ても、朱寿昌の話は異例なものであり、重要な位置を占めてきたのである。

#### < 註 >

- 1 『二十四孝』と言っても、二十四人の人選に違いがあれば、話にも変化が見られる。本稿の主眼は『小学』の朱寿昌にあるため、便宜上、朱寿昌を含む二十四人の孝子譚を「『二十四孝』」と表記する。『孝行録』『二十四孝』の研究については、徳田進『孝子説話集の研究—二十四孝を中心に—』（井上書房、1963年3月）、黒田彰『孝子伝の研究』「二十四孝の研究」（思文閣出版、2001年9月）、金文京「『孝行録』と『二十四孝』再論」『芸文研究』66号（1994年7月）参照。
- 2 『二十四孝』の編纂者とされる郭居敬の原本に近い明代嘉靖年間の刊本『新刊全相二十四孝詩選』（龍谷大学所蔵）を参照。
- 3 徳田進前掲書 157 頁参照。
- 4 坪井直子「『二十四孝』朱寿昌の刺血写経—事実と虚構—統一」『仏教大学大学院紀要』31号（2003年3月）。
- 5 朱寿昌と同じく『二十四孝』に収められることになる庾黔婁の話も朱熹は『小学』に収めた。重病の父を手厚く看病していた庾黔婁は、毎夜、北辰に父の回復を祈っていたところ、空中から声が聞こえてきて父の寿命を「月末まで延ばす」と言われたことが史書に記されている。朱熹はこの末尾の「空中から声が聞こえてきた」という話を削除し、父のために真摯に祈ったことを強調する。拙稿「宋代訓蒙書と朱熹『小学』」『國學院雑誌』117巻11号（通巻1315号）2016年11月参照。また、『小学』と同じ頃に編纂した『孝経刊誤』は、そもそも経書である『孝経』<sup>けいず</sup>に対しても誤りを刊っている。加地信行『孝研究 儒教基礎論〈加地信行著作集Ⅲ〉』（研文出版、2010年10月）参照。
- 6 『宋史』巻456・孝義でも朱寿昌を記した後、「自王安石、蘇頌、蘇軾以下、士大夫争爲



詩美之」とある。

- 7 『宋史』巻 209・芸文志八には、王安石に「送朱寿昌詩三卷」があったことも見える。
- 8 『丹淵集』は、明汲古閣刊本（四部叢刊正編 42 所収）を用いた。
- 9 朱寿昌の正確な生卒年は明らかになっておらず、議論のあるところであるが、文同の記述に加えて、司馬光が朱寿昌のことを詠んだ五言律詩「贈河中通判朱郎中」（『伝家集』巻 9）の題下注に「熙寧中、知広徳軍、年五十三」とあることからすれば、熙寧 2 年（1069）の時に 53 歳と推定される。そうであれば卒年は「七十」（『宋史』巻 436・朱寿昌伝）とあるので、朱寿昌の生年は天禧元年（1017）、卒年は元祐元年（1086）となり、司馬光（1019～1086）とほぼ同世代になるか。
- 10 蘇軾と朱寿昌の交流については、他にも『東坡志林』巻 2 に「會故人朱壽昌康叔守鄂州、某以書遺之」とも見える。
- 11 拙稿「朱熹『小学』編纂考——劉清之小学書からの改修に関して——」『論叢アジアの文化と思想』13 号（2004 年 12 月）参照。
- 12 朱熹の方が『東都事略』を見たという可能性もあるが、おそらく『小学』の編纂の方が先となる。『朱子語類』巻 130 には「先生看東都事略」とあり、朱熹が『東都事略』を見ていたという陳文蔚の記述がある。田中謙二「朱門弟子師事年攷」では、陳文蔚が朱熹に同席していた時期は二期あり、淳熙 15,16 年（1188,89）と慶元 4,5 年（1198,99）である（『田中謙二著作集』第二巻、汲古書院、2001 年 2 月、95 ページ）。『東都事略』が紹熙年間（1190～1194）に刻されているとすれば、朱熹が『東都事略』を見たというのは、慶元 4, 5 年の記録であろう。少なくとも『小学』編纂の方が先となる。
- 13 編纂における刪去ということであれば、『小学』と同時期頃に編纂した『孝経刊誤』も一部の文章を削除している。書名からして「誤りを刊す」とつけており、『孝経』という経書に対しても朱熹は改編を加えているのである。
- 14 卷四以降が立教・明倫・敬身を補うものであることは、『小学』編纂について劉清之とやりとりしていた書簡からもうかがえる。「但今所編、皆法制之語、若欲更添嘉言善行兩類、即兩類之中自須各兼取經史子集之言、其說乃備」（『朱文公文集』卷三五・「答劉子澄」七）とあり、実際に『小学』を編纂する前からこのような二部構成を朱熹は考えていた。拙稿前掲「朱熹『小学』編纂考——劉清之小学書からの改修に関して——」参照。
- 15 『小学』の章分けに関しては、『小学集註大全』（呉訥 集解、陳祚 正誤、陳選 増註、慶安三年・武村市兵衛刊）に依拠した。明倫篇の 16 章を一章とするか二章とするかによって、明倫篇の全章が 107 章となるか 108 章となるかの違いがある。『小学集註大全』は明倫篇を全 108 章とする。
- 16 『小学』には、『孝経刊誤』で朱熹が経文とした文章のみを収めていることは、緒方賢一「『孝経刊誤』と朱子」『集刊東洋学』81 号、1999 年 5 月（緒方賢一『中国近世士大夫の日常倫理』中国文庫、2014 年 3 月所収）に指摘がある。

17 善行篇 10 章に収める薛包の話も (二) の教えの具体例と見られる。前半では憎まれながらもよく両親に事え、父母の心を打ち解けさせるに至ったことを記し、後半では弟亡き後の財産分与において甥 (弟の子) を厚遇したことを記す。しかし甥への対応は、財産を多く分与しながら、その甥はたびたび財産を失い、その都度薛包が救うことになる。朱寿昌が父の宗族、母の遺児たちを手厚く遇し、親族をまとめているのとは異なる。薛包は (一) の好例ではあるが、(二) の例としては適切とは言い難い。陳選もまた、朱寿昌のように薛包に対して特別な解説を加えることはない。